

『単純 X 線写真の読み方・使い方』

黒崎 喜久(編)

山口大大学院教授・放射線医学 松永尚文

これまで、胸部や骨軟部の単純 X 線写真の本は多数刊行されてきたが、全身の単純 X 線写真をカバーする本は刊行されて久しい。

現在でも優れた基本的診断法である単純 X 線検査では、1 枚のフィルム上で全体像を概観できる最初に行われる検査の 1 つであり、経過観察においてもその簡便性・再現性などの点で優れている。さらに、1 枚のフィルムから得られる全体的な情報量の多さから診療の現場で最も多く施行されている。医療経済および患者への負担という観点からも、このような検査を最大限に活用することは大切なことである。しかし、CT・MRI 検査の普及により、やや影が薄くなっているの否めない。単純 X 線写真の所見を十分に評価しないで安易に CT 検査が行われている現状もある。初心に返って単純 X 線検査の役割と限界を再認識する必要がある。そのような背景の元、本書は刊行されたと思われる。

序文の冒頭は、「たかが単純 X 線写真、されど単純 X 線写真」で始まっており、まさに「単純 X 線写真 revisited」といえる。忘れられがちな単純 X 線写真の重要性を再認識する最適の書であり、編者の熱意が感じられる。本書は、総論、頭部・頭頸部 4 章、胸部 13 章、腹部 5 章、骨軟部組織 17 章から構成されており、1 冊に重要なポイントが過不足なくかつ簡潔明瞭に網羅され、かつ最新の知見も盛り込まれている。総論では、デジタル時代らしく、従

来の単純 X 線写真の説明は消え、電子カルテ・フィルムレスに対応して普及しつつある CR の説明がなされている。厳選された豊富な画像を基に読影のポイントを丁寧にかつコンパクトに解説されている。

各領域で現在活躍中のエキスパートで執筆されている「ビューワー」と名付けられたコラムの短文は、囲み記事で 13 項目あり、いずれも名文で、長年単純 X 線写真に造詣の深い先生方の含蓄のあることが記載されており、かみしめて読みたいものである。

392 ページとボリュームがある割には、手頃な厚さで、つい手に取って読みたくなる本である。今回装いも新たに、親しみやすい 2 色刷りで、図は典型例を厳選してある。代表的な文献も厳選してあり、参考に調べるとさらに理解が深まるであろう。

医学の本は進歩が著しく、刊行されたらすぐ内容が古くなってしまいがちであるが、CT・MRI が 21 世紀にどんなに発達しようとも単純 X 線検査がなくなることはなく、そして臨床的重要性・役割は何ら変わることはなく、本書は長く読み続けられる本であろうと思われる。本書は、医学生・研修医・医師に必携の書として、推薦したい 1 冊である。

● B5 / 頁 408 / 2013 年 / 定価 7,140 円(本体 6,800 円 + 税 5%) [ISBN978-4-260-01568-4] 医学書院刊